

LUCERNO



(Bulteno de la Japana Sekcio de ILEI) n-ro 5 majo 2012

Ni agu vigle en somero!

Agadplanoj de ILEI-JP por la somero, 2012

◆ la 45-a ILEI-Konferenco

dato: 2012/07/20 – 2102/07/26

loko: Kunming, Ĉinio

Partoprenos el nia sekcio HORI Yasuo, KINUGASA Hiroshi, UENO Yuriko, YAMAKAWA Setuko, HUZIMOTO Ricko kaj ISIKAWA Tiekō.

Krom niaj sekcianoj, SAITO Tume el Sendai ankaŭ partoprenos.

◆ la 2-a ISOA (ILEI-Seminario en Orienta Azio)

okazos kiel unu el la fakkunsidoj de ILEI-Konferenco.

HORI Yasuo prelegos pri la seminaria temo “Instrumetodo por azianoj”.

Ses el la partoprenontoj en ILEI-Konferenco, krom KINUGASA, buse kaj trajne veturos kun aliaj partoprenontoj el diversaj landoj al la UK en Hanojo.

Iu(j) el ni certe raportos pri sia(j) spertoj dum la vojaĝo en la sekvanta numero de “LUCERNO”.

===INTERESITOJ SERĈATAJ ===

En kelkaj tiel nomataj “alternativaj lernejoj” en Koreio oni nun instruas Esperanton, kaj laŭ onidiro multiĝas lernantoj, kiuj volas lerni la lingvon en tiaj lernejoj.

Mi jam de longe pensis, ke indas sciigi al lernantoj en japanaj similaj lernejoj ekziston de Esperanto kaj eblajn avantaĝojn.

Mi baldaŭ kontaktos kelkajn lernejojn en/ ĉirkaŭ Tokio. Se vi interesiĝos pri la afero, bv. kontaktu min.

===ISIKAWA Tiekō===



Esperanto en super-mezlernejoj en la gubernio Kanagawa dum 1982-2012

Lucerno の編集部の松木さんから、標記のようなテーマで何か書いてほしいと言われた時、正直言って引き受けてよいものかどうかためらった。神奈川県の高校の何校かでこの 20 数年間エスペラントの部活動や授業、講座が行われてきたのは事実だが、どれも自分がエスペラントを始めて活動してきたことと重なり、なんだか個人的な思い出になってしまうのではないかと危惧したからである。

私がエスペラントを始めたのは 1982 年だが、当時、横浜の光陵高校、逗葉高校にもエスペラント・クラブがあったと記憶している。(横浜 E 会の宮崎英子さんや故小野隆夫さんは光陵高校の卒業生である) ですから、ここで述べられることは「1980 年代半ばから 2012 年までの神奈川の高校におけるエスペラント」と限定されることを最初にお断りしておきたい。

私が高校の英語教師になってからなぜエスペラントを始めたのかは、「なんで英語教えるの?—国際理解教育の視点から」(神奈川県高校英語教育部会誌 1985) に書かせていただき、その後、La Movado 誌等エスペラント関係の機関誌や、在日外国人教育研究会の会誌等にも転載されたのでここでは詳しく述べないが、つまるところ、「国際化とは、どの民族どの国民とも対等な人間として見つめあう目を養うことなのではないか。そのためにも英語一辺倒の外国語教育では、真の国際化社会をめざすことはできない」という思いがあったからである。

1982 年にエスペラントを始めた当時、私は横浜の白山高校の教員で英語部の顧問をしていたが、第一回日韓エスペラント青年セミナーに参加し、エスペラントは「通じる、使える」ことを実感した私はこのことを生徒たちに伝えたく、翌年に行われた鎌倉セミナリオに部の生徒たちを連れていった。この時に参加した生徒の一人がその後、横浜エスペラント会の入門講座に参加し講師であった小野隆夫さんと結婚する。(小野さんが急逝されたことはこの意味でも残念でならない。)

1985 年に川崎市にある県立住吉高校に異動となり 11 年にわたり、エスペラント部の指導を行うことになる。住吉高校は家から車で 10 分ほどで行ける近さで、当時は 15 年間は同じ学校にいられる規定だったため、私はここで地域に根をおろしたもろもろの教育、社会活動ができるのではないかと嬉しく思った。

若さの勢いというものは代えがたい力のあるもので、最初の英語の授業で、「世界に言語はいくつある?」クイズからエスペラントのことを話すと、すぐに 10 数名が集まり、同好会の発足となった。NHK の「中学生の勉強室」という月刊誌の取材を受け、写真入りで大きく紹介されたのもこの年である。文化祭には毎年必ず参加し、文通で得た世界の切手(たくさんのエスペランティストが協力してくださった)で作った葉の販売で得た利益を、ポーランドのエスペランティストの少年の義足のために寄付する呼びかけなどには、多くの来校者が共感を寄せてくれ、多額の寄付につながったこともある。朝日、読売、東京、毎日、神奈川新聞などは、よく新聞記事にもしてくれた。外国からの来訪者がある時は、学校にも来ていただき、交流会をよく開いた。日韓青年セミナーに生徒たちが東京近郊の大学生たちの助けで独自に参加できるようになったこともあった。

1986 年 1 月に、夫や川崎市に住むエスペランティストたちと、休眠状態にあった川崎エスペラント会を再興したく、「新生・川崎エスペラント会」を立ち上げたが、その時、住吉高校の部員たちもさまざまな形で協力してくれ、隔月刊の機関誌の名称 **ESKALO**(エスカーロ)を命名したのも、初代部長である。その後、出産、育児休暇で 1 年以上のブランクができたが、家も近かったため、子連れで文化祭準備なども手伝うことができた。

住吉高校には15年間いるつもりであったが、生徒数が団塊ジュニアの後、激減していく過程で、教員の定数減に直面し、泣く泣く1996年に、横浜の新羽高校に転勤することになった。不本意な転勤ではあったが、異動先の新羽高校の当時の職員たちは大変リベラルで先進的な人たちが多く、職員室の雰囲気がかつても風通しがよく明るかった。英語科の中には京大時代にエスペラントをやったことのあるAさん、社会科には横浜E会に所属していらしたTさん、おまけに教頭は川崎E会で誕生したカップルの新婦の叔母にあたる人だった。他の英語科教員もスペイン語が専門だったり、新英研のメンバーがいたり、エスペラントを受け入れてくれる素地が十分にあった。この辺の経緯は、RO誌(96~98年)にも詳しく書いたので割愛するが、不本意な転勤が「エスペラント授業開始」へつながることになる。

当時の新羽高校では新指導要領に基づいたカリキュラムの再編成がおこなわれており、3年生に2単位(週2時間)の必修選択科目を置くことが決まっていた。

98年から実施となるが、「そこにエスペラントをいれたらどうか」という提案が教科会でも皆から指示を受け、カリキュラム委員会でも通り、職員会議で可決されることになった。(残念ながら現在ではこのような民主的な手続きは存在しない)

すでに、それ以前に、校内の「教育研究会(教研)」(これも現在はできない)でエスペラントの模擬授業をやったり、下地づくりはできていたが、そのようなお膳立てをしてくれたのも同僚たちである。ウクライナからの女子学生のエスペランティストが横浜に来たときは英語の授業に来てもらったりして、エスペラントの言語としての有効性をアピールしたりもした。そのことは新聞報道もされた。職員会議で唯一質問があったのが、「最低5年は続けられるのですか」というものであった。

この時点で、神奈川の教員の異動要綱は最長10年~12年となっていたので、「はい、もちろん」と答えた。教育委員会に「学校設定科目」として申請するのに、5年間は続けるというのが暗黙の了解事項だったようだ。

問題は、生徒が集まるか、ということであった。最低12名は集めなくてはならない。これも当時の担任団の配慮だと思うが、エスペラントを熱心に勧めてくれた成果か、なんと最初の年は37人という嬉しい悲鳴のあがる幕開けであった。教育委員会からは、「エスペラント」という特別免許ももらった。

全国の高校でも初めての「エスペラント」の授業ということで、神奈川新聞が「ひと」欄はじめ、授業の様子を写真入りで大きく報道してくれた。(千葉恭記者は退職されたが、長年神奈川のエスペラント運動を報道して下さった方である)

またこの頃、エスペラント界では、「総合的な学習の時間」が新学習指導要領の「目玉」になることと、新羽高校での正規の授業成立の後押しとして、堀さんの提言でALE(Asocio de Lernejoj Esperantistoj)が設立され、出前授業のためのパンフの作成や、広報誌「エスペラントへの招待」の作成(「21世紀へのことばの架け橋」の改訂版)など活発な活動を行った。ILEI-JPに発展的解消されるまで私自身も代表を務めた。

99年からは20~30名という適正規模に落ち着き授業は順調に続いていたが、2002年の1月に思わぬことが持ち上がった。3月に他の学校に異動の決まっていた若い外国語科の教員が病気になり転勤は不可というドクターストップがかかったのである。さて、どうするか。外国語科の中で誰かが代わりに異動しなくてはならない、ということになったのである。転勤してから6年がたとうとしていたが、3年間の担任も終え他の教員たちよりも一番転勤しやすい状況にあった。「でも、エスペラントはどうするの?」開講は前の年にすでに確定している。私は当時、組合の分会長もやっていて、立場上も自分が異動することを受け入れざるを得ず、教務主任らと相談し、校長に「学校設定科目であるエスペラントを続けるために非常勤講師をとることを、教育委員会に要求してほしい」と求めた。エスペラント立ち上げの時とは管理職も変わっていたが、この要求は渋々とはあるがのまざるを得ず、2002年から2012年まで北川久が講師をつとめることになった。

2013年から新指導要領が実施されるのを機に、新羽高校のエスペラント授業は廃止されることが決まった。この10年間で、新羽高校の職員も100%入れ替わり、神奈川では新たな職（総括教諭）の導入、職員会議の議決権の廃止等、かつてのリベラルさはほとんど失われてしまったことは残念だが、ある意味では14年間も、授業としてエスペラントが設置されていたことは驚異的なことだったのかもしれない。私の突然の転勤がなければ、おそらく計画的に私の異動とともに長くても8年間ぐらいで幕を閉じていただろう。

授業としてのエスペラントは正直言って、つらい面もある。これまで、地域の講習会や、クラブで教えてもせいぜい10人そこそこである。生徒たちはあくまでも、授業の一環としてエスペラントを選択するので、理由は様々だが、「単位が簡単にとれそうだから」「楽しそうだから」というのも理由の1, 2位にくる。英語の授業準備、担任業務、他のもろもろの雑務をこなしながら、大人数のエスペラント授業をどう活性化させるかは、なかなか頭の痛い問題でもあった。教科書はイタリアのイラスト満載のテキスト‘LUDU KUN NI’を使ったが、子供向きに作られていることや、母語の異なるイタリア人向けに作られているため、工夫も必要であった。その点、後任の北川久氏はゲームをとりいれるなど、エスペラント教授法研究にことのほか熱心で私よりも楽しい授業を展開していたのではないかと思う。

また、エスペランティストからはよく過剰な期待をされ、「毎年、30人もエスペランティストが誕生するなんてすばらしい」などと言われたこともあるが、そんなことにはならない。彼らは、確かに若いので単語とかよく覚えていて、卒業してから何年かたって会っても「Saluton! Unu, du, tri・・・」などとエスペラントをしゃべってくれることがある。それはそれで嬉しいことだが、彼らがエスペラントを使って、何か行動をしようとか交流をしようといった意志意欲を持っているわけではない。もちろん、長い人生の中で、またエスペラントをやってみよう、という者も現れるかもしれないが今のところそういう卒業生はほとんどいないようだ。高校の正規の授業でエスペラントが設置されることの意義はまず社会的認知ということではないだろうか。文科省の統計があれば外国語教育の「その他」としてエスペラントの文字が必ず現れる。大学の公募推薦試験でエスペラントのことを聞かれたり、自分の特技として述べたものもいる。他校への波及効果もあり、私が新羽高校でエスペラント授業を始めた2年後に横浜翠嵐高校定時制で国語科の国松先生が、エスペラントの授業を始められた。異動されるまでの5年ほどの期間だったと思うが、一つの学校で既成事実となると他の学校でも導入しやすくなるのは事実である。大阪の池田北高校でも数年後に藤本律子さんがエスペラントを教え始めている。

2002年に異動した横浜の城郷(しろさと)高校は新羽のすぐ近くにある高校だが、ここでは「総合的な学習の時間」に力を入れていて、「多様な講座」の中で短時間だが、エスペラントを教えることができた。とりわけ城郷高校で特筆すべきことは2004年ロシアの18歳ピアニスト、アンドレイ・コロベイニコフが来校し、音楽室でミニ・ピアノコンサートを開き、その時の若き音楽教師、田島(高橋)万祐子さんが深く感動し、エスペラントを学び始めたことだろう。2005年に私と一緒にリトアニアでの世界大会、ポーランドでのIJKに参加。三味線演奏で大人気となり2007年の横浜UKでは、やはりポーランドのIJKで出会った天野弥生さんとともにZAIM若者プログラムの中心となって活躍したことは記憶に新しい。その後もアフリカ、ベナンでILEI大会への参加、ILEI-JP副代表を務めるなど積極的な活動を行っているが、現在は2人目のお子さんを出産し育休中である。2人のお子さんにはエスペラントの意味もある名前(宗乃果Sonoka、清杏実Kiami)を命名している。茅ヶ崎市に建てた新居には音楽スタジオも用意し、若いエスペランティストの受け入れ、交流会の実現などに意欲的である。神奈川のエスペラント運動の新しい拠点になる日もそう遠くはないかもしれない。「代理」での転勤がここでも、思わぬ新しい出会いと若い有能なエスペランティストの誕生に結びつくとは、当初は想像もしないことだった。

私の転勤後、96年から住吉高校に異動してきた皆川みずえ先生は、イタリアに住んでいたこともありイタリア語もでき、衣笠方式でエスペラントを学んだこともある社会科の先生。

エスペラント部はその後数年で廃部となったが、皆川先生は、住吉高校の特色となった「国際理解教育」の担当で、毎年、国際理解教育講座の外部講師として、川崎エスペラント会に講師派遣を依頼して下さった。2003年に、相模原の麻溝台高校に異動されてからは、「総合的な学習の時間」の担当として、12月に行われる

「生き方を考える講座」にエスペランチストを招く企画を続けてくださり、アレクサンドラ綿貫さんと通訳として北川久さんは常連の講師となった。

エスペラントという夢のような言葉の存在を知った高校生の頃から、いつか学んでみたいと期待して胸をワクワクさせていたころがあった。残念ながら大学時代は、身近にエスペラントの存在がありながらよい出会いに恵まれず、学ぶ機会も意欲も失いつのまにか忘れていた。しかし遠回りはしたが、逆に英語を道具としての国際コミュニケーションの世界を体験した後だからこそ、エスペラントの重要性を再認識できたといえるのかもしれない。人の人生に「後戻り」というものは存在しないし、自分が今置かれた運命を悔いることなく、前向きに生きていくことこそエスペランチストの生き方だといえないだろうか。交通事故で瀕死の重傷を負われながら、リハビリで見事に回復され、車椅子でどこにでもでかけエスペラントも教え、ピースボートに2回目の乗船を計画されている ILEI-JP の大先輩である鈴木ますみさんの姿に私は「エスペラント (=希望する人) 魂」を感じ、深く尊敬の念を抱いている。

エスペラントを続ける理由は人それぞれ様々だろうが、私自身はエスペランチストであることは、常にマイノリティ (少数派) を意識した国際人を目指す宣言ではないかと考えている。

エスペラントが、時代の支配言語 (現代なら英語) にとって代わることは恐らく近い将来に起こることはないであろうが、エスペラントの存在意義が消えることはないであろう。世界のどこに行っても、エスペランチストの出会いが楽しく心が弾む理由は、エスペランチストは少数派、弱者への思いやりが人一倍強い集団だからではないだろうか。世の中では「いい人たち」という言葉でくられるが、エスペランチストたちは他者への想像力に富んだ人たちが多く私は思う。それが、Esperantujo 特有の文化を生み出しているのではないだろうか。

神奈川の高校では、2013年からの新学習指導要領の施行とともに、「ゆとり」から「授業重視」の方向に多くの学校が転換していく。「総合」も縮小化の方向に向かい、エスペラントを教える機会も減るのではないかと思う。

それは、一見、エスペラント運動にとってはマイナスにも見えるかもしれないが、前述したようにエスペランチストを育てるといった観点からは、あまり悲観しなくてもよいのではないだろうか。

ここ数年、私の所属する川崎エスペラント会には、高校生や大学生はじめ若い人たちの問い合わせが少しずつだが、相次いでいる。年2回、7月は国際交流センターで、1月は市民活動センターでの「フェスティバル」に参加し、エスペラントの展示やミニ講座等を行っている。その時に講座に参加しなくても、あとから問い合わせがくることもある。また、ネット検索で、ホームページから問い合わせをしてきてくれる人もいる。ホームページを担当してくれているのは、住吉高校エスペラント部の OG、高田 (四宮) さんである。

地域での地道な活動を続けながら、エスペラントの存在をアピールしていくことも重要であることはいままでもない。最近入会した大学生姉妹は、イラストが得意でウェブを駆使できる。彼女たちに、今年はフェスティバルや入門講座のチラシのデザインなどを依頼している。

JEJ (青年連絡会) などとも密に連絡をとりあい、時には外国人エスペランチストとの交流会に招き、地域の中だけでの「お楽しみ会」に終わらないよう、若いエスペランチストたちが出会える場を提供していくことも、熟年エスペランチストたちの使命だと私は考えている。

学校では授業や同僚との会話の中で、折りに触れエスペラントのことをさりげなく話し、エスペラントの魅力を伝え続ける存在でありたいと願っている。

「エスペラントのことを話す」という取り組みについて

(群馬エスペラント会 秋山千明)

2010年12月、私は群馬県庁において第1回群馬エスペラント展が開催されることを地元新聞の報道で知り、参加したことがきっかけで翌2011年1月より群馬エスペラント会に入会しました。従って学習を始めてまだ日の浅い者です。高校で理科教師をしておりますが、外国語には比較的強い興味があり、第二外国語として露語、第三外国語として独語を学んだ経験がありました。露語は左近毅先生(後に大阪市立大学教授)に指導を受けましたが、先生は10カ国語が分かるということを知ったときシュリーマンのようだと思い、私はこのことがずっと頭から離れず、自分もいつかはそうなりたいとあこがれながら近年になってNHKのテレビ講座で他の外国語を学習しつつ目標10カ国語の一つにエスペラントを数えておりました。ところがそのチャンスがTVとは違う充実した内容を持って思いの外早く到来して現在に至っているわけです。私のエスペラント学習は、現在は主に月2回程度の例会とエスペラント相撲が主な場所になっております。

このように群馬エスペラント会に入会して間もないので学力も乏しく、しかも例会に毎回参加できていないので活動内容の紹介も難しいのですが、2012年1月になって、今年がエスペラント発表125周年という記念すべき年なので、群馬エスペラント会の活動の一つとして堀泰雄会長の提案で125人の人に「エスペラントのことを話す」活動を行うということになりました。確かにエスペラントに接したことが少しでもあればその名前を覚えているでしょうが、一般にはあまり知られていないようですし、私の職場では英語の先生以外に知っている方は教職員でありながらほとんどいないようでした。かといって友人が非常に多いと言うわけでもないのが自分が話せる相手というのは主に生徒と言うことになります。そこで堀会長に尋ねたところ生徒でも良いことになったので、機会を見つけることになりました。

実のところ露語については、今までもメンデレーエフ(化学者)のようなロシア人が出てくれば、生徒はキリル文字を見たことがないので書いて簡単な読み方を教えたりしましたが全く反応がありませんでした。エスペラントでは元々エスペラント名の人はいないのでなお難しいかなとは思いましたが、話をするくらいならできるだろうと思いついた末、担当科目(理科総合B、2年生)の人類の進化の単元のところで「言葉」という語句が出てくるのを捉えて、これをきっかけとしました。指導内容としては、同じ頃生息していたクロマニオン人とネアンデルタール人では体格も体力も後者がはるかにまさるのに、後者が滅び前者が生き延びたのはコミュニケーションの力だったという定説とからめ、地球上の多くの言語(自然言語と指導)と数ある人口言語の一つとして最も大勢の人が使っているエスペラントと言う言語があり、私も習っていること、ザメンホフの幼少時代の体験から平等で平和な社会を目指した言葉であると話し、簡単な挨拶として「こんにちは」

Bonantagon.と言うんだとの程度の話をしました。

各クラスでこのような話をした後、次の授業から時折授業開始の挨拶で **Bonan tagon.**と言うと、その通りに言う生徒が何人か現れました。露語では全くそのようなことはありませんでしたが、今回はちょっと信じられない事態となり、生徒に聞いてみたところ、ある1人の生徒は「言葉が面白いから」だと言いました。分かりやすい、発音しやすいと感じたのだと思います。全クラスとも予想外の大きな反応となったので、次のステップとして2年生が終わるまでには全員の名前をエスペラントで書いてあげると言う約束をしました。そうするとエスペラントでは自分の名前がどう書かれるのかは興味津津ですが、一方エスペラントはローマ字なので今までのローマ字名と変わらない生徒も一定数出てきます。そうしたときにはがっかりするかと思い、キリル文字と併記して名簿を作り配布しました。この名簿の作成には相当の時間を要しましたが、配布したときの反響はかなり大きなもので、この字はどう読むのかという質問もいくつかありました。一方で案の定「ローマ字と同じだ!」とがっかりした反応もありました。それはやむを得ないことですし想定していた通りでしたが、その補償対策として書いたキリル文字に対しては余りに異質なせいかな反応は皆無でした。

読み方を教えれば良いのですがそれはとても時間がかかるので、ただでさえ授業時間の少ない理科（2単位）の中では無理な相談です。なおこの名簿の裏にはエスペラントのアルファベット、簡単な挨拶などを印刷しておきました。この生徒達は現在3年生で、廊下等の校内で会ったときは挨拶をするのが当校の決まりですが、**Bonan tagon.**と言う生徒が何人かいます。言わない人は恥ずかしいからなのかも知れません。もっとこちらからエスペラントで言えば、エスペラントで返す3年生は増えると思います。当校の3年生はエスペラントという言葉知らない者は1人もいないと確信しています。結果としてエスペラントという言葉の普及にはなったものと思います。

しかし注意すべきことがあります。生徒はこのような話が好きとは限らないということです。まして外国語（英語）が得意で商業高校に来る生徒はむしろ（極端に）少数派ですし、またこれは理科の授業なので理科の内容から離れてあまり長い時間エスペラントの話をすると抵抗のある生徒（何も言わなくても顔つきや態度で分かる）も出てくることがあるので、いくら自分の授業であってもそれは気をつけなければなりません。

次に、新学期になって新しい1年生7クラス282人（男女）を迎えました。今年は1年生7クラスの新科目「科学と人間生活」（2単位）が担当になりました。教科書の最初のところは、科学技術がいかに人間生活に溶け込んでいて、私たちの生活になくてはならないものであるかを多くの側面から教えるのですが、まるで科学技術史のようです。その中にやはり人類が「言葉」を生み出してから・・・という部分があり、これに関連してエスペラントの指導を行いました。今回は自分のコンピュータプログラミングの経験を踏まえ、人工言語にコンピュータ言語も含め、エスペラントやその他の人工言語の話も少し含めて7クラスに同様な話をしました。まだアルファベットも挨拶も教えていないのでエスペラントという言葉があり、自分も学習しているというところで話は止めてあります。今後は授業で時間のあるときに機会を見て、簡単なプリントも用意して配布し紹介し、例によって生徒の名前を書いてあげようと考えています。

なお生徒以外には同僚の教職員、知人に機会があるときに話をしています。残念ながら強い興味を覚える人がおりません。基本的には、外国語に興味がない人、外国語の代表格である英語で苦い思いをしてきた人、何より必要性を感じない人、部活動や私事でとても例会等に出席する時間がない人など理由は人によっていろいろだと思います。生徒に「なぜ勉強しないのか？」と質問したときに生徒達はポカンとして「なぜ勉強しなければならないのか？」という顔つきをしました。私自身は学生時代からの思いがあって学んでいます、ここに見られるように一般に「自分には無関係」あるいは言葉にはならないが自分の世界にはそのような感覚がないと言ったらよいのでしょうか。簡単に知的好奇心がないという表現より、深層心理としてもっと深いものがあるのではないかと思います。人を動かす大きな力は必要性なのかも知れません。平等で平和を目指す素晴らしい言葉ですが、外国語を使わないで生活ができる国に住んでいるのは幸せなことかも知れません。

最後に話した人数を私なりに集計しましたので統計的数字ですが、記載しておきたいと思います。生徒＝のべ958人、同僚＝のべ13人、友人・知人＝のべ7人、合計でのべ978人ということになります（2月12日から4月27日まで間）。もう少しで1000人に達しますが、これは次の機会まで待たねばなりません。

Gunma E-klubo planas paroli pri Esperanto al multe da homoj plejeble.

Mi jam parolis al preskaŭ 1000 homoj, aŭ gelernatoj aŭ kamaradoj aŭ geamikoj.



日本語版「魅惑の言語 エスペラント」和訳作業を終えて

衣笠弘志

エスペラント版 *Malkovru Esperanton* が出版されてから数年が過ぎて、ようやく日本語版発行の目処がたった。2010年9月発足の ILEI 日本支部が、活動方針に掲げた五つのうちの一つであった。

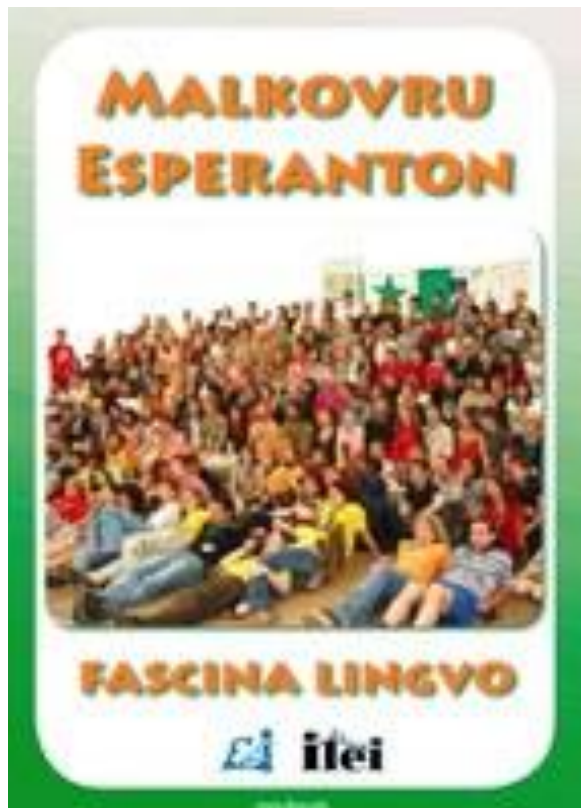
(講習会などで使うために前事務局長の堀さんが和訳して使っていた章に加えて、) 石川・松木・衣笠が訳の分担をして、3人で通し訳をするために、2011年から2012年にかけて計4回、喫茶店で編集会議を開いた。和訳の字数はできるだけ少なくして、高校生にも読んでもらえるように、読みやすさと分かりやすさを優先させた。

エスペラント版は全24ページのカラー印刷で、顔写真が多数入って親しみやすく内容の濃い冊子である。大きさはA6とB5の中間(23.5cm×16.5cm)で、本文の文字が9ポイント程で小さい。もとの写真と和文をどう配置するかが今後の課題である。

7章に分かれた目次は、Eについての基礎知識・Eはどんな言語か・Eについて語る人たち・創始者ザメンホフ・心理学から見たE・よくある質問・各地での会合や世界での大会などで、具体的な情報が盛り沢山ある。

日本語訳出版の許可はすでにもらってあって、現在、柴山さんに監訳を依頼してある。

ALEからの繰入金(約30万円)を、ネット版と紙版の作成に活用できる。発行について何かいいアイデアがあれば、教えて下さるとありがたい。



Membroj de ILEI-JP tradukis “Malkovru Esperanton” japanen kaj preparas publikiĝon.

- ◇ Ĉinumere abundas japanlingvaj artikoloj!
Ĉiam bonvenaj estas artikoloj en Esperanto.
Antaŭdankon!



- ☆ LUCERNO に原稿をお寄せ下さい。
☆ 会員相互の意見交換や情報交換に ILEI-JP のメーリングリストをご活用下さい。

ILEI-JP 代表 石川智恵子 isksanjo@ff.e-mansion.com
ILEI-JP 機関紙編集 松木義信 myoshi@abelia.ocn.ne.jp